



Title	樺太アイヌ語の数詞について
Author(s)	村崎, 恭子
Citation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed., 71-84
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/38301">http://hdl.handle.net/2115/38301</a>
Type	proceedings
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	08murasaki.pdf



[Instructions for use](#)

## 樺太アイヌ語の数詞について

村崎 恭子

(元横浜国立大学教授)

### 1. はじめに

文字のないアイヌ語は話された地域によって大きく三つの方言、北海道方言、樺太方言、千島方言に分けることができる。ここではこれを北海道アイヌ語 (Hokkaido Ainu, HA)、樺太アイヌ語 (Sakhalin Ainu, SA)、千島アイヌ語 (Kuril Ainu, KA)と、その略号で呼ぶことにする。

このうちKAは明治時代にすでに話者は絶えたと報告され、HA、SAも老人間で会話が成立していた70年代を最後に日常語として話されなくなってから半世紀が経過した。

私がやっているのはSAの記述的研究だが、まずその話者との出会いと交流について簡単に述べる。私が研究を始めた1960年代には、戦後樺太から引揚げてきたSAの家族が複数住んでいた北海道の常呂町(トコロチョウ、当時は常呂郡だったが現在は北見市になった)では老人たちの間で盛んにアイヌ語が話されていた。この時代に私が教わったSAの先生は、藤山ハルさん(1900-1974)西海岸ライチシカ出身、太田ユクさん(1894-1976)西海岸タラントマリ出身、長嵐イソさん(1867-1964)東北海岸タライカ出身、の3人であったが、74年にハルさんが亡くなるると同時にこの状況は消え、話者の絶滅をみんな嘆いていた。しかし10年後にB.ピウスツキ蠟管再生プロジェクトのおかげで奇跡が起きて、もう一人の優れた最後の話者、浅井タケさん(1902-1994)西海岸オタスフ出身に私は巡り会い、亡くなるまでの10年余り沢山習うことができた。一方、明治時代に話者が絶えたと伝えられていたKAについては、1960年に私が東大の言語学科学部3年生のとき始めた常呂町でのフィールドワークの2年目の1962年の夏に、千島アイヌ語の話者を訪ねて根室周辺を巡ったことがある。戦後引揚げてきた千島アイヌの方々の消息をたよりに、ことばを覚えていそうな50歳から63歳までの6人の方々に面会してアプローチしたが、結局みんな自分たちのことばを忘れてしまったという空しい結果しか得られなかった。この時の詳しい報告は(村崎1963)を参照されたい。残念ながら今はSAもKAもすでに話者が絶えたと認めざるを得ない。

SAの最後の話者が絶えてからすでに15年がたった今、定年退職して余裕ができたので、2008年9月に北大で開催されたシンポジウム『サハリンの言語世界』の発表をきっかけにして、SA、KA、HAの方言比較研究を数詞についてやってみることにした。

アイヌ語の数詞法は20進法というのが定説である。しかしSAの現代語、18世紀前半のKA、現代HAの旭川や宗谷方言などでは10進法が認められる。本研究では、この実態をSAの数詞法を中心にKA、HAとも比較しながら具体的に考察して、アイヌ語数詞法の実態、言語変遷とその歴史的背景について、皆さんと一緒に考えてみたい。

### 2. アイヌ語の数詞法

アイヌ語の数詞法の基本はhot(20)を基準とする20進法であるというのが定説で、こ

これはHAに限定すれば正しいが、各方言を詳しく見ると必ずしもそうではない。SAの現代語、18C前半のKA、現代のHA旭川や宗谷方言などでは10進法が認められる。この実態を以下に、HA、KA、SA、の順で具体的に考察する。

## 2.1 北海道アイヌ語（HA）の場合

### HA資料の背景\*

調査者	調査年	被調査者、背景、方言、地域など
上原熊次郎	1793、 寛政4	『藻汐草』江戸通辞が編纂した2500語が収録されている分類アイヌ語辞典、フィッツマイエルやチェンバレンのアイヌ研究の原資料となった。
能登屋円吉	1864、 慶応4	西モンベツの番人、能登屋円吉がイシカリでの勤務中、上川方面まで出かけ蝦夷人と交わり集めた語彙集。
能登屋円吉	1868、 文久4	西モンベツの番人、能登屋円吉が採集した分類西蝦夷語辞典。約1200語が巻末にいろは順に並んでいる。
田村すず子	1955 昭和30	平賀サダ、鳩沢ふじの、『アイヌ語方言辞典』のための調査、沙流方言。
服部四郎	1955 昭和30	門野ナンケアイヌ、『アイヌ語方言辞典』のための調査、旭川方言。

\* 各資料の実例は巻末の6つの表で示した。[表1] 千島アイヌ語の数詞、[表2] [表3] 幕末和資料数詞(1)(2)、[表4] [表5] [表6] は方言別数詞比較表、ただし[表3]の最後の『樺太土人語日用会話』は幕末ではなく明治38である。

### HA数詞法の特徴

HAは三大方言中最もアイヌ語の原初的特長を保っている。方言の数も話者の数も圧倒的に多いから資料も豊富である。ただし、話者の激減はHAでも顕著である。2008年12月現在存命する完璧な話者は数人にとどまる。

幕末資料の全て、旭川方言と宗谷方言を除く現代の全ての方言（八雲、沙流、帯広、美幌、名寄）は「20」を意味するhotを基準語とする20進法である。しかし、現代の旭川と宗谷方言では、本来は20を意味するhotneを「10」を示す基準語として用いて10進法が行われている。これは比較的新しいSAの影響によるものと思われる。つまり、HAでは古来20進法が固持されていると言える。

1から10までの基本数詞の語形成の由来については、諸説あって、興味ある話題であるがここでは触れない。

## 2.2 千島アイヌ語（KA）の場合

KA資料の背景 [表 1]

調査者	調査年	背景、方言、地域など
Krasheninnikov	1738	カムチャッカのポリシェレックでポロムシル出身の千島アイヌから採録。
Dybowski	1879-83	ポーランドの医師としてカムチャダルで勤務した。その間シムシム島出身の千島アイヌから 1900 語を調査。ラドリンスキーが後に 1892 年に編集出版した。
鳥居竜蔵	1899	色丹島へ移住したKAから 700 語を収録。

## KA数詞法の特徴

1. 1 から 9 まではHA, SAと本質的に同じ。ただし、18Cの (Kra.1738) では8と9の *tupis(ampe)*, *sinepis(ampe)* の(ampe)の部分が省略されて、*tupis-*, *sinepis-* と言うことは特に注目する必要がある。この特徴は同時代の『もしほ草』にも認められる。
2. 10 以上の数は、18C前半のクラシュニンニコフ資料では、*wampe* (～十) を基準語とする10進法が一般的に行われている。しかし1000以上の数の表現に (h)otne (20) の痕跡がある。例えば、1000 は *wan-otne-wampe*(10×10×10) 2000 は *tu-wan-otne-wampe* (2×10×10×10) というように示される。ただしこの時点では *otne* は (20) ではなく (10) の意味で用いられている。
3. 11 から 19 までは、HAやSAと同様に1の桁の数を最初に言って *xx kasuma* (余り) と言って続けるが、KAが特徴的なのは *wambe kasuma* の順序がHA, SAと逆になっている点である。たとえば、11 は、*Shine Wampe Kasouma* (SAは *sineh ikasma wanpe*) という。
4. 20 から 100 までの数については、18Cの (Kra.1738) では10進法だったのが (h)ot, (h)owat を基準とする20進法に逆戻りしている。(Torii 1919) (Dybowski 1879-82, Murayama 1992)
5. また、100 以上の数詞の言い方は特徴的である。100 は、Kra 資料では *wan-wampe* (10×10) で10進法、しかし19C末の鳥居資料で *aruwan-howat* (6?×20)、(Dybo 1879-82) で *askinot* (5×20)となっていて、20進法である。
6. 1000 は、18C, 19C全ての資料で同じ、10進法であるが、(h)otne が本来の意味 (20) ではなく、(10) の意味で用いられている。つまり、1000 は、*wan-otne-wampe* (10×10×10)。この特徴は現代旭川方言と宗谷方言に共通する。これは注目すべき点である。c f. 旭川、宗谷方言で *sine-hot* (10), *tu-hot* (20)。

これをまとめると以下ようになる。

- ・KAでは最古の18C資料 (Kra.1738) ですでに、*wampe* を基準語とする10進法が行われている。しかも多数の数、10000まで記録されている。このことは、KAではSAより早く多数の物資を扱う交易が行われていたことを示唆する。
- ・しかしその後19Cの資料 (Dybo 1879-82) (鳥居 1899) では20進法になってしまってい

る。ただし、100 までで、多数の記録はない。

- ・一般的に言って 10 進法の方が多数を容易に数えられると想像される。KA や HA の場合にあてはまる。
- ・同時代の異なる方言の数詞法に共通点が見られる。例えば、(もしほ草 1792) と (Kra.1738) で 8,9 の *tupis(ampe)*, *sinepis(ampe)* の *ampe* が省略されていること。[表 5]

### 3. 樺太アイヌ語 (SA) の数詞法

#### SA 資料の背景

調査者	調査年	背景、方言、地域など
La Perouse	1787	サハリンの Tchoka (オチホ、落帆?) で 161 語を採録。
Dobrotvorski	1867-71	ロシアの軍医としてサハリンに滞在した時 1 万余語を収録。
Laufer	1899	ドイツ生まれのアメリカの言語学者。サハリンの南東岸で調査した。
Pilsudski	1902-4	ポーランドの民族学者でサハリンに流刑されてニブフ語や SA を多く収録した。(Piu 1912) に <i>tanku</i> についての記述はあるが、 <i>kunkutu</i> については未出で触れていない。
金田一京助	1913	『あいぬ物語』の付録の「樺太アイヌ語大要」。 <i>tanku</i> も <i>kunkutu</i> もでてくる。
服部四郎	1955	樺太ライチシカ方言話者、藤山ハルさんから語彙調査。『アイヌ語方言辞典』

#### SA 数詞法の特徴 [表 4]

- 1 から 10 までは、KA、HA と基本的に同じ構成。違うのは、音節末の *-p* が SA では *-h* になることと (5) を意味する *asiknep* の子音クラスターを嫌って *k* が抜けて *'asneh* となっていること。
- 11 から 19 までは、1 の位の数を先に言って *ikasma* (余り) をつけて *wanpe* (10) を続ける。これも HA、KA と同じ。ただし、KA では *'ikasma* と *wampe* の順序が逆になっている。
- 20 以上は 10 進法になる。20 から 99 までは、外来語 *kunkutu* (～十) の導入によって *kunkutu* の前に 1 の位の数をつけて *tu-kunkutu* (20)、*re-kunkutu* (30)、*iine-kunkutu* (40) のように 10 の位を言って、1 の位を続ける。例えば、21 は *tu-kunkutu-sineh* とする。ここで注意すべきは、10 を表す語は *\*sine-kunkutu* ではなくて *wanpe* (10) であること。
- 次に注意すべきは、20 を表す「老人ことば」*'onne 'itah* として *hohne* (20) が報告されていることである。服部 (1957) 参照。これは、SA でも昔は 20 を表すのに *hohne* が用いられて 20 進法が行われていたことを示唆する。
- 10 の単位と同様に 100 以上も、外来語 *tanku* (～百) の導入によって *sine-tanku* (100)、*tu-tanku* (200)、*re-tanku* (300) のように言う。

6. (～千) は wan (10) と tanku (100) を組み合わせて wantanku (～千) という。例えば、2008 年は, tuwantanku 'orowa tupesan paa (2 千それから 8 年) と言う。このように S A では 1000 の単位までは多数を容易に数えることができる。
7. 人を数える助数詞 (～人) の表現については、H A の sinen (1 人) 'iwaniw (6 人) の V-en, C-iw のような語尾はなく、文字通り sine'aynu (1 人)、'iwanaynu (6 人) のように表現する。

以下に、**kunkutu** (10 の単位語)、**tanku** (100 の単位語) について、その出現状況を資料にしたがって見ていく。

1. この二語は S A 最古の資料であるラペルーズ (1787) には登場しない。ここでは 20 は、wampebi kasma (wampe)(10+10)、30 は、wampebi kasma cine-ho(10+1×20)、40 は、ine wampe(4×10)、または tu-ho (2×20) というように、20 進法の基準語である ho が残っているが、同時に wampe を (～十) を表す 10 進法の基準語として用いている。つまり 10 進法の兆しが見える。[表 5]
2. **kunkutu** と **tanku** の二語は共にドブロトボルスキー (1975) に載っている。ドブロトボルスキーはこの本の補注で、数詞の 20 進法が S A では基本的な手法であると強調しているが、辞書の本文では **kunkutu**、も **tanku** も詳しい説明がある。
3. ドブロトボルスキー (1867-71) でも、ラウファー (1899) でも hoh(20)を基準語とする 20 進法が基本的に行われる一方、同時に **kunkutu**、**tanku** を基準語とする 10 進法が導入されて優勢となり、10 進法と 20 進法が共用されている。同時代のピウスツキ資料 (1912) には、第 14 話のキーリンの話の中で **tanku** は沢山でてくる。 **tanku ; hundred , a word of Olcha origin.**として、テンをとる罌を数えるのに使う 100 を数えるオルチャ語だと説明している。**kunkutu** については言及がないが、不在とは書かれていない。ピウスツキと同時代を生きたバチラー (1938) には **tanku** はあるが **kunkutu** は出ていない。
4. 金田一 (1913) のヤマベチ出身の山辺安之助の南極探検などの自叙伝の付録、樺太アイヌ語大要の中で、**kunkutu**、**tanku** が共に山丹語から外来要素として移入されて (～十) を **-kunkutu**、(～百) を **-tanku** という用法が流行していった、交易などで多数の品物を数えるときには、この 10 進法ばかりが使われている、と報告されている。しかしここで注意すべきは、千以上の数を表すのに hoh が保守されていることである。つまり 2000 は、hoh-tanku (20×100)と表す。例えば、2001 円は sineh ikashma hohtanku。[表 6]
5. そして服部 (1964) では、**kunkutu**、**tanku** による 10 進法のみが報告されている。ただし「老人ことば」で hohne(20) が報告されている。ただし、\*sine-kunkutu とは言わず wanpe という。
6. いずれにしる **kunkutu**、**tanku** の 2 語は、H A にも K A にもなく、S A だけに流布したことばで、この背景には歴史的な必然性があったようだ。

#### 4. まとめ

以上の考察からアイヌ語の数詞について以下のことが確認された。

1. アイヌ語の数詞において、1～19までは方言、時代を問わず基本的に共通である。  
アイヌ語は原初的にはどの方言でも20進法であったと思われる。
2. 時代と共に10進法と20進法が交差するようになった。SAでは20以上の数詞について10進法がkutunkutuやtankuなどの外来語を基準語として発達して浸透した。これのきっかけになったのはクロテンなどの毛皮交易の発達が考えられる。
3. しかし20進法が古く10進法が新しいと一概には言えない。KAでは18C前半の最古の資料(クラシュニンニコフ1738)にすでにwampi(10)を基準語として10進法が行われている。
4. それで、19C後半(デイボフスキ1879-84)(鳥居1899)になると10進法は姿を消してot(20)を基準語とする20進法に逆戻りをしている。
5. 各資料例を10進法か20進法かでまとめると以下の表ようになる。各項目の最後の( )内は基準語の形式を示す。
6. これを見ると20進法から10進法へ移行する場合に基準語として外来語を移入する方法と、自国語を転用する方法とがあることが分る。

#### 20進法か10進法かの方言と基準語

20進法	旭川と宗谷を除くHA方言(八雲、幌別、沙流、帯広、美幌、名寄)(hot)。 幕末資料すべて(ホツ)。 SAの(Lap.1787)(ho)。 KAの(Dyb.1879-83、鳥居1899)(ot)。
10進法	HAの旭川、宗谷方言。(hotne) 19世紀以降のSA資料(Dob.1867-71、Lau.1899、金田一1913、服部1955)。(kunkutu, tanku) KAの(Kra.1738)(wampe)
両用	SAの(Lap.1787、Dob.1867-71、Lau.1899、金田一1913)

最後にこれまでのことから、アイヌ語数詞法における20進法から10進法への言語的推移の過程をSAとKAについて推論すると以下の様なプロセスが仮定できる。これはあくまでも筆者個人の想像の域を超えるものではない。周辺分野の専門家の御批判を待ちたい。

#### [SA数詞法の推移]

1. 18C末にtankuが満州語経由で流入し、少し遅れてkunkutuがカムチャダール語経由で流入して、10進法が始まった。
2. 19Cになると、tannkuやkunkutuを使った10進法が、クロテンなどの毛皮交易を中心に多用されるようになった。同時にhohne(20)が多数を表す単位語として使われて残った。

3. 20Cにはいると *tannku* と *kunkutu* を使った 10 進法が完全に浸透して、*hohne* (20)は古語、老人ことばとしてのみ残った。

#### [KA数詞法の推移]

1. 18C前半 (Kra. 1738) にすでに 10 進法が *wampi* (10) を使って行われていた。
2. しかし 19C後半になると 10 進法は姿を消して、*ot* (20) を基準語とする 20 進法が行われるようになった (Dybo1879-83, Torii 1899)。
3. KAでは 20 進法から 10 進法へ移行する際にSAのように外来語を用いることはなかった。同様な言語の保守的傾向はHAの旭川や宗谷方言にも見られる。

今後の課題としては、アイヌ語の諸方言、特にSAやKAと周辺言語との言語接触がいつ、どこで、どのように起こったかを明確にすること、またその文化的歴史的背景、特に交易のルートなどの背景を明らかにすることなどである。

その他、興味深いことは、一般的に言って 20 進法よりも 10 進法の方が多数を数えるのに容易という傾向が認められる。つまり、10 進法が記録されている方言、SAのライチシカ方言や (金田一 1913)、KAの (Kra.1738) などでは、大きい数まで収録されていることから、これらの方言では大きい数を頻繁に使う歴史的要因があったと推測できるのである。オホーツク文化の伝播経路や後の山丹貿易の流通路などが大きなカギを持つと思われる。周辺領域の研究者の皆さんの御教示を得たいと切に願う。

\* [村崎が習った樺太アイヌ語話者の方々] 敬称略

藤山ハル (1900-1974) 西海岸ライチシカ、 太田ユク (1894-1976) 西海岸タラントマリ  
長嵐イソ (1867-1964) 東北海岸タライカ、 浅井タケ (1902-1994) 西海岸オタスフ

#### 参考文献

- 服部四郎 (1957) 「アイヌ語における年長者層特殊語」『民族学研究』21/3 [『日本の言語学』大修館に収載]
- 服部四郎 (1964) 『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- 林子平 (1785) 『三国通覧図説』天明5
- 池上二良 (1997) 『ウイльта辞典』北大図書刊行会.
- 金田一京助 (1913) 「樺太アイヌ語大要」『あいぬ物語』博文館.
- 金田一京助 (1935) 「数詞から見たアイヌ民族」『日本民族』岩波書店.
- ラペルーズ, 小林忠雄編訳 (1988) [1797] 『ラペルーズ世界周航記 日本近海編』白水社.
- 村崎恭子 (1963) 「千島アイヌ語絶滅の報告」『民族学研究』29/4
- 村崎恭子 (1979) 『カラフトアイヌ語一文法編』国書刊行会.
- 村山七郎 (1971) 『北千島アイヌ語』吉川弘文館.
- 村山七郎 (1992) 『アイヌ語の起源』三一書房.
- 田村すず子 (1913) 「アイヌ語」『言語学大辞典』第一巻. 三省堂.
- 鳥居龍蔵 (1903) 『千島アイヌ』吉川弘文館.



- 上原熊次郎 (1792) 『藻汐草』 寛政 4. [金田一京助解説 成田修一撰 『アイヌ語資料叢書 藻汐草』 国書刊行会, 1972 に復刻]
- Batchelor, J. (1938) *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. Fourth Edition. Iwanami-Shoten. [J.バチラー 『アイヌ・英・和辞典』 岩波書店]
- Dobrotvorskii, M.M. (1875) *Ainsko-Russkii Slobar'*. Kazan. [M.M.ドブロトボルスキー 『アイヌ語ロシア語辞典』 カザン]
- Klaproth, J. (1826) *Asia Polyglotta Sprachatlas*. Paris.
- Klaproth, J. (1831) *Trois Royaumes*. Paris. [林子平 (1785) 『三国通覧図説』 の仏訳]
- Laufer, B. (1917) The Vigesimal and Decimal Systems in the Ainu Numerals: With Some Remarks on Ainu Phonology. *Journal of the American Oriental Society*. vol.37.
- Murayama, S. (1968) *Ainu in Kamchatka*. 『九州大学文学部紀要』 12.
- Pilsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Languages and Folklore*. Cracow. In K. Refsing ed. *Early European Writings on the Ainu Language*, vol.10, Curzon, 1996.
- Refsing (1996) Milet-Mureau. L-M. *Voyage de La Perouse autour du monde* (Paris. 1797) Glossary of Ainu in vol.3. In K. Refsing ed. *Early European Writings on the Ainu Language*. vol.1, Curzon, 1996.
- Tamura, S. (2000) *The Ainu Language*. 三省堂. [「アイヌ語」 『言語学大辞典』 第1巻, 三省堂の英訳]
- Torii, R. (1919) Les Ainou des Iles Kouriles. *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*, vol. 42/1. [鳥居龍蔵 『千島アイヌ』 東京帝国大学理科大学紀要. 第42冊第1編]
- クラシェニンニコフ S. (1755) 『カムチャッカ地誌』 ペテルブルグ.
- ラドリンスキー編 (1892) 『クリル列島のシュムシュ島に住むアイヌの方言辞典、B. デイボフスキー教授蒐集』 クラコフ.

## Numerals in the Sakhalin Dialect of Ainu

Kyoko MURASAKI

(Retired Professor, Yokohama National University)

The Ainu language can be divided into three main dialect groups: Hokkaido Ainu (HA), Sakhalin Ainu (SA), and Kuril Ainu (KA). It is generally considered that the Ainu number system is based on a vigesimal system. However, as far as modern SA is concerned, a decimal system is used. This paper gives actual examples from the available materials and compares them with KA and HA. I hope to consider the relevant linguistic changes and historical background with everyone here.

千島アイヌ語の数詞

[表1]

Japanese	Krasheninnikov 1738 (Torii, 1919)	Krasheninnikov 1738 (Murayama 1968)	Krasheninnikov 1738 (Murasaki 2008)	Torii 1899 (Torii 1919)	Dybowski 1879-83 (Murayama 1992)
1	Sipnep	Sinep	sinep	Shine	sinip
2	Tonoup	Tuup	tuup	Dobetchi	tubic
3	Rep	Rep	rep	Rebitchi	ribici
4	Inep	Inep	inep	Inep	inip, inini
5	Asik	Asik	asik	Ash'kimep	askinip, asikinini
6	Ivan	Ivan	ivan	Iwampe	yevampiy, ivanini
7	Arouwan	Aruan	aru'an	Arouwampe	arvampiy, arvanini
8	Toubis	Tubis	tupis	Dobisampe	tupsampiy, tupsanini
9	Sinepis	Sinepis	sinepis	Shimbesampe	sinip sampiy
10	Ouupis	Uupis	uupis	Wambe	vampiy
11	Sinep-ikasmoua	Sinep-ikasmua	sinep-ikasmua	Shine Wampe kasouma	sinip vampikasma
12	Touupitcha ikasmoua	Tuupitschi ikasmau	tuupica-ikasmua	Dobetchi Wampe Kasouma	tubic vampikasma
13	Repitch (ikasmoua)	Reepitsch-ikasmua	reepici-ikasmua	Rebitchi Wampe Kasouma	ribic vampikasma
19	Sinepisan	Sinepisan-ikasmua	sinepisan-ikasmua	Shinebesampe Wambe Kasouma	sinip sampiy vampikasma
20	Touampe	Tuampe	tuampe	How'at	ot
30	Reouampe	Revampe	rewampe	Wambe tot	vampiriot
40	Ineouampe	Inevaampe	inewampe	Towat	vampitoot
50	Asikneouampe	Asiknevampe	asiknevampe	Wambe ereot	
60	Ivanousampe	Ivanvampe	ivanvampe	Inat	
70	Araouanouampa	Arvanvampe	aru anvampe	Wambe Ashkeneot	
80	Toubisanouampe	Tubisanvampe	tupisanvampe	Ashkeneot	tupsen
90	Sinepisanouampe	Sinepisanvampe	sinepisanvampe	Wampe ewanhot	
100	Ouanouampe	Uanvampe	wanvampe	Arouwam howat	askinot
200	Tousnouampe	Tuanvampe	tuwanvampe		
1000	Ouanotneouampe	Uanotnevampe	wan-otne-wampe		ivanot
2000	Touanotneouampe	Tuanotnevampe	tu-wan-otne-wampe		
10000	Teanonnouampe	Tevanonnevampe	te-wan-onne-wampe(?)		
20000			言わない		
100000		(ignor.) [不知]			
1000000		(ignor.) [不知]			

[表2]

幕末和資料数詞(1)

意味	『蝦夷語集録』円吉1864(文久4) 原典	村崎転写	『番人円吉蝦夷記』1868(慶應4) 原典	村崎転写
1	シ子ツフ	sinep	シ子ツフ	sinep
2	トワフ	tup	トツフ	tup
3	レウフ	rep	レツフ	rep
4	イ子ツフ	inep	エ子ツフ	enep
5	アシキ子フ	askinep	アシキ子フ	askinep
6	イワンへ	iwanpe	イワンへ	iwanpe
7	アルワンへ	aruwanpe	アルワンへ	aruwanpe
8	トへサンへ	tupesanne	トへサンへ	tupesanne
9	シ子へサンへ	sinepesanne	シ子へサンへ	sinepesanne
10	ワンへ	wanpe	ワンへ	wanpe
11			シ子フエガシマワンへ	sinepekasimawanpe
15				
20	ホツ	hot	ホツ	hot
21	シ子フイカシマホツ	sinepikasimahot	シ子フエガシマホツ	sinepekasimahot
25			アシキ子エガシマホツ	askineekasimahot
30	ワンへトホツ	wanpeituhot	ワンへトホツ	wanpeituhot
31	シ子フイカシマワンへイホツ	sinepikasimawanpeihot	シ子フエガシマワンへトホツ	sinepekasimawanpeituhot
35			アシキ子エガシマワンへトホツ	askineekasimawanpeituhot
40	トホツ	tuhot	トホツ	tuhot
41			シ子フエガシマトホツ	sinepekasimatuhot
50	ワンへイレホツ	wanpeirehot	ワンへイレホツ	
60				
70				
80				
90				
100	アシキ子ホツ	askinehot	アシキ子ホツ	askinehot
200				
500			アシキ子ホツエガシマトシ子フノホツ	askinehotekasimatusinewanohot
1000	ワンアシキ子ホツ	wanasikinehot	アシキ子シネフノホツ	askinewanohot
3000			アシキ子シ子フホツエガシマワンシ子フノホツ	askinesinewanohotekasimawansinewanohot
10000			アシキ子ワンシ子フノホツ	askinesinewanohot

幕末和資料数詞(2)

[表3]

意味	『藻汐草』1793(寛政4) 原典	村崎転写	『北海道土人語案内樺太土人語日用会話』1904(明治38) 村崎転写	原典	意味
1 銭	1 シ子ツツ	sinep	シ子カペーカ	sine kapeeka	1 銭
2 銭	2 ツーツツ	tuup	トカペーカ	tu kapeeka	2 銭
3 銭	3 レツツ	rep	レカペーカ	re kapeeka	3 銭
4 銭	4 イ子ツツ	inep	エ子カペーカ	ene kapeeka	4 銭
5 銭	5 アシキ子ツツ、アシキ子	askinep, askine	アシ子カペーカ	asne kapeeka	5 銭
6 銭	6 イワンベ、イワン	iwanpe, iwan	ユワンカペーカ	yuwan kapeeka	6 銭
7 銭	7 アルワンベ、アルワン	aruwanpe, aruwan	アルワンカペーカ	aruwan kapeeka	7 銭
8 銭	8 ツーベシヤンベ、ツベシ	tupeshanpe, tupesi	トベサンカペーカ	tupesan kapeeka	8 銭
9 銭	9 シ子ベシヤンベ、シ子ベシ	sinepeshanpe, sinepesi	シ子ベサンカペーカ	sinepeshan kapeeka	9 銭
10 銭	10 ワンベ、ワナキ	wanpe, wanaki	ワンベカペーカ	wanpe kapeeka	10 銭
11 銭	11 シ子ツフイカシマワンベ	sinep-ikasma-wanpe	ホン子カペカ	honne kapeeka	20 銭
15 銭	15 アシキ子イカシマワンベ	askine-ikasma-wanpe	エongoマシカ	erko komaasika	50 銭
20 銭	20 ホツ	hot	シ子ゴマシカ	sine komaasika	1 円
21 銭			トゴマシカ	tu komaasika	2 円
25 銭			レゴマシカ	re komaasika	3 円
30 銭	30 ワンベイツ、ホツ	wanpe-i-tuhot 4×20-10	エ子ゴマシカ	ene komaasika	4 円
31 銭			アシ子ゴマシカ	asne komaasika	5 円
35 銭			ユワンゴマシカ	yuwan komaasika	6 円
40 銭	40 ツ、ホツ	tuhot 2×20	アルワンゴマシカ	aruwan komaasika	7 円
41 銭			トベサンゴマシカ	tupesan komaasika	8 円
50 銭	50 ワンベイレホツ	wanpe-i-rehot 3×20-10	シ子ベサンゴマシカ	sinepeshan komaasika	9 円
60 銭	60 レホツ	rehot 3×20			
70 銭	70 ワンベイカシマレホツ	wanpe-ikasma-rehot 10+3×20			
80 銭	80 イ子ホツ	inehot 4×20			
90 銭	90 ワンベイカシマイ子ホツ	wanpe-ikasma-inehot 10+4×20			
100 銭	100 アシキ子ホツ	askinehot 5×20	ワンゴマシカ	wan komaasika	10 円
200 銭	200 シ子ツツホツ	sinetunehot	ホン子ゴマシカ	honne komaasika	20 円
500 銭					
1000 銭					
3000 銭					
10000 銭					

[表4] 方言別数詞比較表(1)

日本語	樺太ライチシカ方言 (服部 1964)	北海道沙流方言 (服部 1964)	北海道旭川方言 (服部 1964)
1	sineh	sinep	sinep
2	tuh	tup	tup
3	reh	rep	rep
4	iineh	inep	inep
5	asneh	asiknep	asiknep
6	iwanpe	iwanpe	iwanpe
7	arawanpe	arawanpe	arawanpe
8	tupesanpe	tupesanpe	tupesanpe
9	sinepisanpe	sinepisanpe	sinepisanpe
10	wanpe	wanpe	wanpe, sine hot
11	sineh 'ikasma wanpe	sinep 'ikasma wanpe	sinepikasma (wanpe)
12	tuh 'ikasma wanpe	tup 'ikasma wanpe	tupikasma wanpe
13	reh 'ikasma wanpe	rep 'ikasma wanpe	repikasma wanpe
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20	tukunkutu, hohne(老)	hot, hotnep	tuhot
21	tukunkutu sineh	sinep 'ikasma hot	sinepikasma tuhot
22	tukunkutu tuh	tup 'ikasma hot	tupikasma tuhot
30	rekunkutu	wanpe 'etuhot	rehot
40	iinekunkutu	tuhot	inehot
50	asnekunkutu	wanpe 'erehot	asknehot
60	iwankunkutu	rehot	iwanhot
70	arawankunkutu	wanpe 'e'inehot	arawanhot
80	tupesankunkutu	inehot	tupesanhot
90	sinepisanpunkutu	wanpe 'e'asiknehot	sinepisanhot
100	sinetanku	asiknehot	atuyta
101	sinetanku sineh 'ikasma	sinep 'ikasma 'askunehot	?
110	sinetanku 'orowa wanpe	wanpe 'ikasma 'askunehot	?
111	sinetanku 'orowa sineh 'ikasma wanpe		?
200	tutanku	wanhot	?
300	retanku	?	?
1000	sinewantanku	?	?
2000	tuwantanku	?	?
3000	rewantanku	?	?
1人	sine'aynu	sinen	sinen
2人	tu'aynu	tun	tun
3人	re'aynu	ren	ren
4人	iine'aynu	inen	inen
5人	asne'aynu	asiknen	asiknen
6人	iwan'aynu	iwaniw	iwaniw
9人	sinepisan'aynu	sinepisaniw	sinepisaniw
10人	wan'aynu	waniw	waniw

[表5] 方言別数詞比較表(2)

日本語	Sakhalin (La Perouse 1787) (Refsing 1996)	藻汐草 (1792) (成田 1972)	Sakhalin (Laufer 1899) (Laufer 1917)
1	cine (Tchine)	シネツプ	si-ne
2	tu (Tou)	ツーツプ	tu
3	te (Tche)	レツプ	te
4	ine (Yne)	イネツプ	ii-ne
5	asne (Aschne)	アシキネツプ、アシキネ	asik', asis-ne
6	iampe (Yhampe)	イワンペ、イワン	i-wan, i-wam-pe
7	arawampe (Araouampe)	アルワンペ、アルワン	a-ru-wampe
8	tubi sampe(Toubi schampe)	ツベシャンペ、ツベシ	tu-pe-sampe
9	cinebi sampe(Tchinebi sampe)	シネベシャンペ、シネベシ	si-ne-pe-sampe
10	wampe (Houampe)	ワンペ、ワナキ	wam-pe
11	sinebi kasma (Pchinebi kassma)	シネツプイカシマワンペ	
12	tubi kasma (Toubi kassma)	ツツプイカシマワンペ	
13	tebi kasma(Tchebi kassma)	レツプイカシマワンペ	
14	inebi kasma(Ynebi kassma)	イネツプイカシマワンペ	
15	asnebi kasma(Aschnebi kassma)	アシキネイカシマワンペ	
16	iambi kasma(Yhambi kassma)	イワンイカシマワンペ	
17	arawambi kasma(Araouambi →)	アルワンイカシマワンペ	
18	tubi sambi kasma(Toubi schampi →)	ツベシャンイカシマワンペ	
19	cinebi sambi kasma(Tchinebi schambi→)	シネベシイカシマワンペ	
20	wampebi kasma(Houampebi kassma)	ホツ	tu-kunkutu
21			
22			
30	wampebi kasma cine-ho (Houampebi kassma tchine-ho)	ワンベイツホツ	re-kunkutu
40	ine wampe, tu-ho (Yne houampe touhch-ho)	ツポツ	ii-ne-kunkutu
50	asne wampe, te-ho (Aschne houampe taich-ho)	ワンベイレホツ	asis-ne-kunkutu
60		レホツ	i-wan-kunkutu
70		ワンベイカシマレホツ	a-ru-wan-kunkutu
80		イネホツ	tu-pe-san-kunkutu
90		ワンベイカシマエーホツ	si-ne-pe-san-kunkutu
100	tu asne wampe te-ho (Tou aschne houampe taich-ho)	アシキネホツ	si-ne-tanku
101			
110			
111			
200		シネワネホツ	tu-tanku
300			re-tanku
1000			wan-tanku
2000			
3000			
1人		シネニ	
2人		ツーニ	
3人		レーニ	
4人			
5人			
6人			
9人		シネニハイタワンニ	
10人			

[表6] 方言別数詞比較表(3)

日本語	樺太東南方言 (金田一 1913)	Kuril (Kracheninnikow 1738) (Torii 1919) ?は村崎記入	Kuril (Torii 1899) (服部 1964) ?は村崎記入
1	shineh	Sipnep	shine; shinep
2	tuh	Tououp	doobechi; tubichi
3	reh ineh	Rep	reebichi, rebichi
4	ashishineh	Inep	inep
5	ineh	Asik	ash'kimep, ash'kinep
6	iwampe	Ivan	iwampe
7	arawampe	Arouan	aruwampe
8	tupesampe	Toubis	dobisampe
9	shnipisambe	Sinepis	shinibesampe
10	wampe	Ououpis	wambe
11		Sinep-ikasmoua	shine wambe kasuma
12		Tououpitcha ikasmoua	doobechi wambe kasuma
13		Reepitch ikasmoua	reebichi wambe kasuma
14			
15			
16			
17			
18			
19		Sinepisan	
20	hoh, tukunkutu	Tou-(ou)ampe	howat
21			shine howat kasma
22			dobechi howat kasma
30	wan e tuhoh, rekunkutu	Re-ouampe	wambe tot
40	tu hoh, inekunkutu	Ine-ouampe	to wat
50	wan e rehoh, ashishnekunkutu	Asikne-ouampe	wambe ereot
60	re hoh, iwankunkutu	Iwan-ouampe	inat ?
70	wan e inehoh, arawankunkutu	Arouan-ouampe	wampe a'shkenot ?
80	ine hoh, tupesankunkutu	Toubisan-ouampe	ashkine'at ?
90	wan e ashishnehoh, shinepesankunkutu	Sinepisan-ouampe	wambe ewanhot ?
100	ashishne hoh, shinetanku	Ouan-ouampe	aruwan howat ?
101	shineh ikashma shinetanku		
110	wampe ikashma shinetanku		
111			
200	tutanku	Tou-(ou)an-ouampe	
300	retanku		
1000	wantanku	Ouan-otne-ouampe	
2000	hohtanku	Tou-an-otne-ouampe	
3000	rewantanku		
10000		Teanonnouampe ?	
1人	shine ainu		
2人	tu ainu		
3人	re ainu		
4人	ine ainu		
5人	ashishne ainu		
6人	iwan ainu		
9人	shinepesan ainu		
10人	wan ainu		